



医療の現場アラカルト - Vol.11

英語担当 Kさん

診察の場には、患者さんのご家族や友人が付き添われることがあります。「日本語が話せる付き添いの方がいれば通訳は楽なのでは?」と思われるかもしれません、実際には慎重な対応が必要な場面が多くあります。例えば、付き添いの方が先回りして説明してしまうと、内容が正確に伝わらない恐れがあります。特に診断や投薬、インフォームド・コンセントの場面では、誤った情報が医療行為に直結するため、通訳士が「ここは私が通訳します」と役割を明確にする必要があります。

また、患者さんと付き添いの方の意見が食い違う場合もあります。最近の事例では、患者さんは母国で手術を受ける準備を整えていたにもかかわらず、弟さんが心配のあまり日本での手術を医師に強く求めてしまうことがありました。気持ちちは理解できても、尊重されるべきは患者さんご自身の意思であり、通訳士はその軸が揺らがないよう対応に努力します。



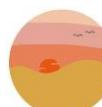
さらに、患者さんは母語のみ、付き添いの方は英語のみ話すというケースでは、日本語から英語、そして患者さんの母語へと複数の言語を介するため、通訳の負担は大きくなります。医療者や通訳士が把握できない言語で患者さんと付き添いが話すこともあり、誤解が生じないよういつも以上に念入りな確認が欠かせません。加えて、診察に電話でご家族が参加し、複数の人が会話することで状況が複雑になることもあります。

医療通訳士は語学力だけでなく、医療知識や守秘義務、中立性などの専門的な訓練を受けています。第三者としてではなく、医療者と患者さんをつなぐ専門職として、安心して任せていただければ幸いです。通訳の質と安全性を守るため、私たちはこれからも地道に取り組む必要があると感じています。

海外の食品表示にびっくり!



南米から帰国した通訳士がお土産にくれたお菓子。パッケージを見ると「高糖質」「高カロリー」「高脂肪」の黒いラベルが…! ちょっとドキッとしたが、これは健康リスクをきちんと伝えるための表示なんだそう。糖や脂質の摂りすぎが、虫歯や肥満、糖尿病などにつながることを知らせ、食生活を見直すきっかけにしてもらうためなのだと。一般的に日本人は健康意識が高いと言われていますが、中国でも健康的な生活を心がける人が多いようです。対してオーストラリアでは“Health Star Rating”というマークで、食品の「健康度」を5段階で表示しています。ちなみに、あの大人気お菓子ティムタムは…まさかの0.5! 一番低い評価という結果でした。。。それでもつい手が伸びちゃいますよね♡ 最近では日本でもフードロスや賞味期限の表示が注目され、食への意識が少しずつ変化しています。国によって異なる食品表示、そこから見える価値観の違いにハッとさせられました。

ロンチエで過ごす幸せ時間
～世界の夕方と夜の違いって？～

子どもの頃、ペルーで暮らしていた医療通訳士にとって、夕方5時の「ロンチエ」は一日の中でも特別な時間でした。日本の3時のおやつやイギリスのアフタヌーンティーのようなもので、サンドイッチと紅茶を楽しみながらテレビを見る、幸せなひとときだったといいます。その分、夕食は夜8時半や9時と遅めで、いわば1日4食の生活でした。ところが日本に移ると、子どもは7時までに夕食・入浴・就寝準備を済ませるという規則正しい生活に驚いたそうです。

国や地域によって「夕方」や「夜」の感覚は大きく異なります。南ヨーロッパでは夏の夜は9時頃まで明るく、人々は広場で遅くまで過ごします。台湾の夜市や、ベトナムの早朝のにぎわいも、文化が生む時間の使い方の違いです。

こうした違いは医療現場にも影響します。絶食開始後に「まだ夕方だから」と食べてしまったり、「食前・食後」の感覚が日常の食事リズムと合わず誤解が生じたりします。だからこそ通訳士は、具体的で丁寧な説明と確認を心かけ、必要に応じて医療者の力を借りながら、患者さんの“時間の感覚”とのズレを埋めていきます。

時間のとらえ方の違いも文化の一部。正確で安全な医療のためにには、その背景を理解することが大切です。

